

# JLTA Newsletter No. 33

## 日本語テスト学会

### The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 33 発行代表者: 中村優治 2012年(平成24年)6月1日発行  
発行所: 日本語テスト学会 (JLTA) 事務局  
〒389-0813 長野県千曲市若宮 758 TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970  
e-mail: youichi@avis.ne.jp URL: <http://jlta.ac>



\*\*\*\*\*

#### 会長就任挨拶

会長 中村 優治(慶應義塾大学)

日本語テスト学会の会員の皆様におかれましては、お元気で教育活動・研究活動および学内外の業務にご活躍のことと存じます。

浪田克之介前会長(北海道大学名誉教授)の後をうけて、2012年4月1日より、本学会の第4代会長職を引き継ぐことになりました中村優治(慶應義塾大学)と申します。どうぞよろしくお願い致します。

1996年9月に学会設立発起人メンバーに加えさせていただいて以来、これまで皆様には一会員として、理事として、さらには副会長として大変お世話になり、また役員職責には微力ながら関わってまいりましたが、会長職というのは初めてのことであります。会員の皆様には何かとご不便をおかけしたり、行き届かない点もあろうかと存じますが、本学会の更なる発展のために尽力したいと考えております。これまでもましてご指導・ご協力のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、1996年に設立された「外国語教育評価学会」(The Japan Language Testing Association: 略称 JLTA) は2001年4月1日より、日本語名称を「日本語テスト学会」に変更し、今日に至るまで、わが国の外国語教育改善の視点を外国語能力の測定と評価の研究・実践に求め、国際社会の外国語教育発展に貢献することを目標に発展してまいりました。本学会の活動も、早15年という月日を経たこととなります。この間、3代の会長や副会長、理事を始めとする先生方、とりわけ事務局長のご苦勞・ご尽力には大変なものがあったと思います。会長就任にあたり、改めて諸先生方のこれまでのご苦勞、ご健闘を労い、讃えさせていただきますと同時に、言語テストに関心をよせて、本学会の発展をこれまで支えてくださいました会員の皆様に感謝の意を表したいと思っております。

本学会は、例年開催される全国研究大会、及び研究例会、さらに学会誌などにおける会員の皆様の積極的な活動により学会としての存在意義を大いに高めてまいりました。また、最優秀論文表彰委員会による最優秀論文表彰制度は会員の研究意欲をさらに高め、更なる発展

的研究が期待されます。ワークショップにおいては会員のみならず多くの参加者への啓蒙活動も含めてテストングの知識の共有が行われ、理論と実践の両面から語学教育の向上発展に貢献していると考えております。

一方目を転じて国際社会活動を見ますと、研究発表者や基調講演者の海外からの参加や招聘、また国際学会での本学会員の発表により国際交流はこれまでもまして盛んになり、本学会の貢献は国内外を問わず発展の一途をたどっているように思われます。

しかしここで少々立ち止まって、会員の中から寄せられる囁きに耳を貸す余裕が必要な気がします。その囁きとは「JLTAを小中高大の教師にもっと役立つ学会にできないか」とか「JLTAを中学校・高校教師が発表しやすい学会にできないか」という声であります。そもそも発足時の学会は上述しましたように「外国語教育評価学会」で、教育と評価を常に表裏一体と考えての命名でした。現在もその精神は脈々とつづいていますが、今一度初心に立ち返り、この囁きに何か応えていかなければならないような気がします。15年前の原点に立ち返るのは古臭いようですが、昨今、やはり言葉のCEFRは正式にはCommon European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessmentです。後半の部分は教育と評価は一体であり、学生(生徒)、教師(テスト関係者)はみな一体であることを訴えているように思われます。本テスト学会が小学校を含めた、中学、高校、大学の先生方に「教育と評価」という共通のテーマで研究発表、例会などの交わりの場を模索し、提供できればなによりです。その萌芽的活動はすでに1月に鹿児島で行われました35回研究例会ではじまっており、大変嬉しく思います。

交わりの場はface to faceの例会、学会、ワークショップのみならず、今日のITをうまく活用してJLTAのWebsiteに、小中高大の先生が使えるようなvideo materialやonline materialを載せるなど幾つかの形態が考えられます。こちらの方もすでにその一端が始まっております。具体的には、日本語テスト学会(JLTA)第15回全国研究大会のワークショップの資料を担当者よりご提供いただき、学会ウェブページに掲載しております。大変ありがたいことです。このような活動をさらに充実させていきたいと思っております。

私の会長としての役目の一つは会員の皆様のこのようなご意見、ご希望、ご提案などが取り上げられやすい環境を提供し、会員の皆様が活動、活躍しやすい学会運営をすることであると思っております。

さて、2012年度の第16回全国研究大会は10月27日(土)に専修大学生田キャンパスにおいて行われることが決定し、大会の成功に向けて鋭意準備をすすめております。その他の委員会も次なる目標に向かって新たな活動を展開しております。関係者の各先生方にはご苦労、ご迷惑をおかけすることになりますが、本学会の向上・発展のために、ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様がそれぞれの職場におきまして、外国語能力の測定と評価の研究・実践に優れた教師・研究者としてご活躍し、その成果を日本語テスト学会の諸活動にも活かしていただけますよう祈念しまして、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

Servant Leadershipを胸に。

第 34 回日本語テスト学会  
研究例会報告

2012 年 1 月 21 日(土)

於:鹿児島大学郡元キャンパス

共催:鹿児島県中学校教育研究会  
英語部会

各々の発表について、以下に報告を記載致します。会場校の金岡正夫先生、お世話になりました。

(事務局, 広報委員会)

**新学習指導要領が求めるコミュニケーション能力とその評価のあり方—コミュニケーション能力と評価のあり方—  
ユニカティブなテストづくりにむけて**

通常の例会とは異なり、上記タイトルのもと、①基調講演、②ミニシンポジウム、③ワークショップの3部構成で行った(個人・共同研究発表枠なし)。参加対象を JLTA 会員、鹿児島県中学校教育研究会英語部会会員(中英研)、中学校英語教員、一般・学生とし、JLTA と中英研との共催で行った。JLTA 会員 4 名(中村事務局長、島田勝正研究会運営委員長、島谷浩同委員、金岡正夫同委員)、中英研より約 20 名、大学生・院生 3 名、大学教員 3 名、中英研以外の中学英語教員数名が参加した。

① では、島谷氏(熊本大学)が、「新学習指導要領とこれからのコミュニケーション能力—教科指導における新たな知識とテストづくり」と題して 70 分間講演を行った。4 技能の統合という新たな教科指導目標に触れ、新たなテストづくりにむけた示唆が述べられた。言語テストの基礎知識、ユニカティブなテストが捉えるべき要件、TOEIC 試験の問題構成の変化など、基礎から最新の情報

に至るまで、内容的にうまくまとめられた講演であった。

② では地元の中学校英語教員 2 名、県教育庁義務教育課指導主事 1 名、そして島谷氏を指定討論として迎え、4 名のパネリストの間で率直な議論が交わされた。これまでのテストづくりの醍醐味、問題点(不満点)、そして新学指に伴う新たなテストづくりの観点(作問留意点と新たな評価方法・基準)をどうすべきか、それぞれの立場から意見を述べてもらい、フロアーからの質問やコメントも歓迎した。50 分近くの討論となり、盛り上がりを見せた。

③ のグループワークでは、3 名 1 グループとなり、対面式に机を配置し、初対面同士でグループをつくらせ、準備した資料とパワーポイントをもとに、限られた時間(予定の 90 分から 60 分に変更)でテストづくりに取り組んだ。語彙、文法、構文などの理解確認をする設問による従来型ではなく、推論発問を取り入れた議論の展開やトーン(論調)に着目するなど、想像力や推測力、そして論の展開を分析させるスキルにむけた質問づくりをグループで行った(新学指対応の中学英語テキストを一部題材使用)。中村、島田、島谷の三氏も加わった(各グループに分散)。



閉会に合わせて JLTA、中英研、各事務局長からのコメントがあった。当日アンケート調査を行い(22名より回答)、上記3点について肯定的な評価が得られ、ほぼ全員が継続的に今回の例会を開催してもらいたいと要望した。予定どおりの時間運びができず、時間が足りなかった点は、司会と企画を担当した者として深くお詫びしたい。高大連携が叫ばれているが、その前に中大連携が重要とも思える会合となった。

報告者 金岡正夫  
(鹿児島大学)

## 海外の学会・研究会 参加報告

### KELTA 2011 参加報告

報告者 小泉利恵 (常磐大学)

学会名 The 7th Annual KELTA (Korea English Language Testing Association) Conference: 2011 International Conference  
開催日 2011年8月20日  
開催場所 Education Information Hall, Seoul National University, Seoul, Korea

### 充実した国際大会

今回 JLTA delegate として、印南洋氏(豊橋技術科学大学[当時], 芝浦工業大学[現在])とともに、JLTA より旅費の補助と、KELTA より宿泊施設の提供をいただき、研究発表を行ってきた。KELTA の年次大会(以降 KELTA)は1日で行われ、午前中に基調講演2件と、午後3部屋でのパラレルセッション形式での研究発表23件があった。

大会テーマは“Impacts of high-stakes exams (利害関係の大きい試験の影響)”であった。これは、大学入試選抜などに現在用いられている

Korean (College) Scholastic Aptitude Test の英語部門を、National English Ability Test of Korea (NEAT) の Levels 2 and 3 へ 2012 年に替える予定であることと、NEAT はインターネット使用のテストで、リーディング・リスニングに加え、スピーキングとライティングの測定が始まるという背景を踏まえたものである。研究発表は大会テーマに合わせたものが多く、NEAT 関連の発表も4件あった。基調講演もテーマに沿った内容だった。Antony Kunnan 氏 (California State University) の “Positive and negative effects of high-stakes language testing: Accentuating the positive and eliminating the negative” と Sara Cushing Weigle 氏 (Georgia State University) の “Current trends in high-stakes writing assessment” である。

Kunnan 氏は、利害関係の大きいテストで起こりやすい問題として主に以下を挙げた。(1) 1種類のテストの結果で重要な決定がなされ、他の情報で調整されないこと、(2) テストが信頼性や公平性などの必要な性質を持たず、テスト関係者に妥当性や公平性を吟味する専門知識やリソースがないこと、(3) 高い信頼性を求めて多肢選択式問題を多用し、批判的思考力を測らないこと、(4) テストに指導内容を合わせてしまい、本来あるべきカリキュラム内容が狭められて運用されること、(5) 受験者の一部が指導を受けられない、再受験を受けにくいなどの理由で不利になること、(6) 受験者のテスト不安の向上に加えて、退学率の上昇がみられること、(7) 障がいをもつ受験者に対してテストの修正がなされず、配慮に欠けること、(8) カンニングや替え玉受験が行われることである。それでも利害関係の大きいテストを社会から排除することはできないため、テストがより良い影響力を行使し、悪い影響を排除するための努力をすべきだとのことだった。

その方策として、以下を述べていた。テストで何らかの決定を下す際に、テストだけでなく学校の成績や推薦書などの多様な情報を用いること。測るべき重要な内容を系統的に含めたテストにすること。テスト開発者やテスト使用者は、妥当性検証を定期的・系統的に行うこと。独立機関としてテストを管轄する部署を設けること。受験の機会を複数設けるか、別な方法で評価を受ける機会を提供すること。テスト答案や結果などの情報の開示を簡単に請求できるようにすること。多肢選択式問題の割合を減らすこと。採点に誤りがないかの確認を、テスト採点の必須のプロセスとして含めること。受験者に診断的フィードバックを提供し、受験者がテストを通して学べるようにすること。政府は、倫理的で専門知識に基づく実践と相反するような法的指示 (legislative mandates) を出さず、政策立案者は社会に良い影響を与える政策を作ること。

2つ目の基調講演で Weigle 氏は、ライティングが利害関係の大きいテストにも含められてきている現状を紹介した上で、専門職業意識 (professionalism) を高め、テストを監視し、ライティング評価の妥当性を高めていくことが必要だと述べた。またタスクと評価に関して、以下のように語った。

ライティングタスクにおいては、トピックが全ての受験者にとって分かりやすく、タスクが現実的で、受験者が能力を示せるようなものにすべきである。読んだテキストの内容を書いてまとめるような「統合タスク (integrated tasks)」が最近使われてきている。統合タスクでのライティングは、単独のライティングと関連はあるものの、異なる要素も測ることが分かってきている。そのタスクの利点としては、測るべき領域のカバー範囲を広げられ、現実的であり、内容の偏りを減らせることである。欠点としては、提示されたテキストから過度に借用する受験者がおり、リーディング

がライティングに影響し、2つを区別することが難しいことである。単独のライティングタスクとともに統合タスクを用いることは、利害関係の大きいテストにおいても可能だろう。

評価基準は、できるだけ詳細に記述するのではなく、評価者が適切なカテゴリーを選ぶのに十分なぐらい詳細に記述するので十分である。自動採点システムについては、人間の評価とともに使い、アルゴリズムが透明で、利害関係者の監査にオープンなものであれば、利害関係の大きいテストにおいても有用なツールになると考える。

どちらの基調講演も大会テーマにふさわしい内容であった。講演後の質疑応答では、その理念を運用する際の困難点とその対策が話題になった。

#### JLTA と比較して

年に1回、1日のみの大会であるという点で、KELTA と JLTA の全国研究大会 (以降 JLTA) は類似している。それだけに相違点に気づくことも多く、ここでは4点挙げてみたい。KELTA は海外からの発表者が多く、国際色豊かである。発表が全体で23件のところ、日本より3件 (Randy Thrasher 氏、印南洋氏、小泉)、アメリカより3件、イランより2件、香港より2件、イギリスより1件、マレーシアより1件と、合わせて12件が海外からの発表者によるものだった。大会名にも International Conference と入れ、大会プログラムの表紙にも世界地図を埋め込んでいるところからも、学会の国際化を一つの使命としていることが分かる。そのために、発表内容を論文としてまとめ、KELTA のジャーナル (*English Language Assessment*) に大会当日までに投稿すれば宿泊施設を無料提供する旨を発表者募集要項に書き、海外の発表者を募っている (なお、JLTA delegate の場合はジャーナルへの投稿の義務なし)。また、北京で開かれる World Congress of Applied Linguistics

(AILA2011) と開催日が近く (8月23日～28日)、KELTA の後に AILA に参加するという発表者もあり、KELTA の日程も工夫されていた。JLTA も近年、海外からの研究発表の応募が数件見られるようになってきた。海外からの発表者があることで、参加者の層がより広がり、交流も活発になり、各地での言語テストの現状と課題の認識も深められる。JLTA も、英語の大会名を含め、今後の方向性を検討する時期に来ているかもしれない。

第2の相違点は、KELTA での発表言語は全て英語だったことである。2011年の JLTA では23件中13件が英語の発表であった。JLTA では日本語テストの発表も多く、KELTA は韓国「英語言語」テスト学会であるが、JLTA は日本「言語」テスト学会であり、JLTA の方が扱う範囲はより広い。そのため、JLTA では日本語での発表にも意義がある。この点を深化させれば、JLTA では言語テスト全般を扱うということで、外国語としての英語・日本語のテストだけでなく、母語としての日本語のテスト (日本語検定、日本漢字能力検定) などを幅広く明示的に対象とすることも考えられる。上記の国際化だけでなく、国内に向けた発信と貢献も求められているだろう。

第3に、KELTA では基調講演が2つあったが、シンポジウムはなかった。JLTA では午後にシンポジウムを開き、2・3組のパネリストと1名の討論者が同じテーマについて語り合う。手前味噌になるが、シンポジウムはあった方が良く、様々な建設的な意見の交換がしやすく、大会テーマの深化も図りやすいだろうと感じた。

第4に、2011年では JLTA も KELTA も発表件数が23件と同数だったが、KELTA は3部屋でのパラレルセッション形式で、JLTA は5部屋でのパラレルセッション形式だった。KELTA では、1件の発表は質疑応答を含めて30分が割り当てられ、2件または3件が休憩なしに連続

で進められ、1ブロック終わったところで20分休憩があった。JLTA での発表は質疑応答を含めて40分で、1件ごとに移動・休憩時間として10分設けたために、パラレルセッションが多くなった。JLTA は発表時間を長くとり、内容を聴衆により伝えられるように40分発表の形を長年とってきた。また「研究発表の間の移動時間がほしい」という大会参加者の希望を踏まえ、移動時間も長めにとってある。しかし、JLTA では発表件数が増えるにつれ、パラレルセッション数が増え、聞きたい発表が重なり (プログラム作成者としても、内容が極力かぶらないように頭を悩ませ)、また参加者がいろいろな部屋にばらつくことで聴衆が少なくなりがちという問題点もある。KELTA の大会プログラムには、3ページ程度の発表要旨または論文が載せられており、JLTA の1ページ程度の発表要旨よりも充実した内容だった。発表時間が短いために伝えきれない内容を伝えたり、発表が聞けなかった場合に後で参照したりするために掲げているのだろう。今後 JLTA でどうするかについては、JLTA の事務局次長としては、会員の皆さまからご意見をいただきながら、より良い方向を見定めたいところである。

KELTA は、1日の大会とは思えないぐらいに、非常に内容の濃い充実した学会であった。今後も JLTA は KELTA と交流を続け、delegate を毎年送りあうことになっている。来年以降、JLTA delegate への希望者が多く出ることを祈っている。





## ACTFL 年次大会 報告

報告者 長沼君主 (東京外国語大学)

研究会名 ACTFL Annual Convention  
開催日 2011年11月18日-20日  
開催場所 Colorado Convention Center,  
Denver, CO, USA

### ACTFL 年次大会視察

昨年度に引き続いて、東京外国語大学英語学習支援センターでは、GP 予算による評価研究のための海外視察として、ACTFL 年次大会への参加を行った。現在、開発を進めている TUPS e 言語ポートフォリオの参考として、LinguaFolio の最新研究動向を押さえるためである。

学会で注目を集めていたのは改訂を前にした ACTFL Proficiency Guidelines に関する発表であったが、昨年ほどの規模ではなかったものの、LinguaFolio に関する発表もあり、LinguaFolio, Jr. を利用したケース事例収集プロジェクトへの参加の呼びかけなどがあった。

ちなみに、ガイドラインの 2012 年度版はすでに ACTFL ウェブサイト上で公開されており、Superior のさらに上に Distinguished が追加されたのみならず、スピーキングのビデオやリスニングの音声を含め、各技能のそれぞれのレベルのサンプルを注釈つきでオンラインで確認できるようになっている。産出技能サンプルだけでなく、受容技能の素材サンプルが示されているのが興味深い。

LinguaFolio Online と同様のシステムとしては、AVANT Assessment の開発している iCAN® などもあり、生徒や教師画面だけでなく、保護者画面も用意され、アップロードされた自分の子どもの課題や自己学習の成果の EVIDENCE を具体的にみることができ、説明責任を高めるのと同時に、保護者の学習への関与を奨励する設計となっている。日本でも CEFR-J が正式公開されるなど、フレームワークへの関心が高まっているが、ポ

ートフォリオのもたらす可能性へのさらなる議論が必要だろう。

## English Profile セミナー 報告

報告者 長沼君主 (東京外国語大学)

研究会名 English Profile Network Seminar  
開催日 2012年2月2日-3日  
開催場所 Hughes Hall, Cambridge, UK

### English Profile ネットワークセミナー

昨年度に引き続いて、東京外国語大学英語学習支援センターも参画している English Profile Programme のネットワークセミナーへと参加し、現在、構築中の学習者作文コーパスからみた日本語学習者の基準特徴についての分析の中間報告を行った。

English Profile では、Vocabulary Profile が教育・研究者に対し、無償公開され、Grammar Profile についても公開に向けての準備が進められているところであるが、Tony Green 氏からさらなる Functions Profile の開発の現状報告がなされ、Discourse Profile の開発の必要性への示唆もなされた。また、スピーキング・コーパスの構築についても Mike McCarthy 氏から進捗報告がなされ、ターン・テイキングなど、会話特有の表現についての議論がなされた。

CEFR-J でも投野由紀夫氏を中心として、東アジア各国の教科書コーパスに基づいた語彙リストが開発されており、公開予定であるとのことであり、他にも British Council と EQUALS で共同開発した Core Inventory もすでに公開されているが、フレームワークやチェックリストに示されている can-do statements に基づく記述文だけでなく、具体的な言語材料が手に入るようになることで、教材開発やテスト開発への波及効果が期待され、さらなる動向に注目したい。

米国応用言語学会 2012 ポストン大会  
報告者 片桐一彦 (専修大学)

学会名 The American Association for  
Applied Linguistics (AAAL)  
2012 Annual Conference  
開催日 2012年3月24日-27日  
開催場所 Sheraton Boston, Boston, MA, USA.

語彙サイズの縦断的測定に関する研究発表のため、本研究大会に参加した。

動機づけ研究で有名な Zoltán Dörnyei 氏の研究口頭発表の部屋には立ち見でも入りきれないくらいの聴衆を集めていたが、応用言語学やテスト研究で有名な研究者がここでは書ききれないくらいたくさん発表していた。

ここまでは国際学会では普通のことだが、報告者が感心した企画を紙幅の関係上一つだけ紹介したい。それは、Publishing in Applied Linguistics Journals というセッションである。大会2日目のなんと夜8時半から1時間ほど開催された。内容は一言で言うと、「国際ジャーナルへの投稿のススメ」

である。Language Learning や Applied Linguistics や Studies of Second Language Acquisition といった著名な国際ジャーナル(10種類分ほど)の編集責任者を務めている各研究者10名ほどが登場した。それぞれのジャーナルの特徴なども紹介されたが、全般的にはどのように国際ジャーナルに投稿するのかについて主に質疑応答形式で話がなされた。投稿してから査読者の意見をもらい修正を何回も経て掲載までにはだいたい2年かかるとのことだった。また、国際ジャーナルに多数発表しあられだけ浩瀚な書籍を何冊も上梓している Rod Ellis 氏が、「私も最初の国際ジャーナル投稿時には採用されなかった。あきらめないうで、掲載されるまで挑戦することが大切である。」とご本人が言っているのを聞いて、急に親近感が湧いた。

今大会は、米国ボストンでの開催だった。滞在中、Harvard 大学、MIT 大学、John F. Kennedy Presidential Library も訪問し、研究分野以外でも知的刺激を大いに受けてきた。

< 編集後記 >

今号では、学会長による巻頭言、JLTA研究例会報告、海外の学会・研究会参加報告の執筆をお願いしました。ご執筆くださった先生方、ご快諾くださり誠にありがとうございました。

日本言語テスト学会事務局  
〒389-0813 長野県千曲市若宮 758  
TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970  
e-mail: youichi@avis.ne.jp  
URL: <http://jlta.ac>



編集： 広報委員会

委員長 齋藤英敏 (茨城大学), 副委員長 長沼君主 (東京外国語大学)

委員 秋山實 (東北大学大学院/株式会社 eラーニングサービス),  
片桐一彦 (専修大学), 佐藤臨太郎 (奈良教育大学)

今号編集責任者： 前委員長 片桐一彦 (専修大学)